九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

創作と経済危機 ： 『三つの物語』と書簡

大橋, 絵理
大分県立芸術文化短期大学国際文化学科

https://doi.org/10.15017/9219

出版情報：Stella. 26, pp.103-116, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

創作と経済危機
――『三つの物語』と書簡――

大　橋　絵　理

フローベールは生涯，毎日のように親戚や友人たちに手紙を書き送ったが，その内容の組織的な分析として 1993 年には論文集『作品の作品，フローベール書簡の研究』[1] が出版され，主に同時代作家たちとのあいだに繰り広げられた創作と芸術理論についての議論が注目を浴びた。だがその他ではごく限られた著書や論文を除き，書簡は作品分析のため補足的，部分的に引用・利用されるのが通例であった。なかでも『三つの物語』は小品と見なされるためか，これと書簡との関係については現在までほとんど論じられていない。しかしながら『三つの物語』の執筆状況の特異性を考慮すれば，書簡の考察を抜きにしてはこの作品の重要性を十分に理解することは難しい。翻って当該書簡の正確な位置づけを図るためにも，準備作業としてまずは同作執筆の経緯を概観しておく必要があるだろう。

フローベールは，1872 年 8 月に『ブヴァールとペキュシェ』の構想をえて以来，膨大な資料を読破し準備を整え，74 年 7 月頃から創作を開始するが，それを 75 年 8 月半ばに中断してしまう。そして同年 9 月末から，突如『三つの物語』を書き始め 1877 年 2 月半ばにこれを完了，その後直ちに『ブヴァールとペキュシェ』を再開するのである。フローベールは創作開始にさいし細心綿密な文献調査を行うのが常であった。そのなかで『三つの物語』だけがいっさい下準備なしに書き始められたのであり，『ブヴァールとペキュシェ』の執筆期間にあたかも異物のごとく唐突に挿入された印象さえ与える。そもそもフローベールには，最初のコント『聖ジュリアン伝』完成間近まで，他の 2 作を書き継いで 3 作構成とする考えはまったくなかったのである[2]。では，唯一の短編集が成立しえたのはなぜなのか。本稿では，このような問題意識にもとづき，書簡の分析によって『ブヴァールとペキュシェ』断念の理由を問い，あわせて『三

つの物語』創作の特質を探りたい。

1.『ブヴァールとペキュシェ』と破産の危機

『ブヴァールとペキュシェ』の執筆中断には，2つの理由があると考えられている[3)]。ひとつはフローベールの近親者や友人たちの死，もうひとつは姪の夫の破産問題だが，まず前者から検証・確認しよう。『ブヴァールとペキュシェ』に取りかかる1872年8月に前後する時期，すなわちまずは69年7月に親友ブイエ，ついで72年の4月に母親，10月にゴーティエ，さらに73年10月にエルネスト・フェドーと，作家が心を許していた数少ない人々が次々と亡くなっている。たとえばゴーティエの死について彼は，72年10月28日のマチルド皇女宛書簡で，「あまりにも多くの死があります。次から次へとあまりにも多くの死！〔…〕かわいそうなテオ。最も大切な友人だったのに。偉大な文学者，偉大な詩人で，偉大な心の持ち主だった」[597] と心から嘆く[4)]。さらに，74年の8月21日にも姪カロリーヌへ「私は楽しくない。全然楽しくないのだ。かつてなく懐かしいブイエの死が痛ましく思い出される」[852] と親友を失った悲しみを語っている。この時期の彼が孤独感に苛まれていたことは疑えまい[5)]。

だが，このような寂寥感を告げながらも，彼は『ブヴァールとペキュシェ』のための準備を着々と進めている。74年6月12日付エドモンド・ラポルト宛書簡に「私たちの発見旅行の出発を来週の木曜日にすることには，何の異存もない。〔…〕前もって申し上げておくが，何時ここに戻るかは見当がつきませんよ。とにかく，片をつけてしまわなければならない。私のふたりの好人物の住む場所を見つけないことには帰るわけにはいかないのです」[810] とあるように，主人公たちが住む場所を求めノルマンディー地方に数日間の旅行をし，満足のいく結果を収めている。また74年7月29日には，「いよいよ『ブヴァールとペキュシェ』にとりかかります。私は誓いをたてました。もはや後にはひけません」[843] とツルゲーネフに決意を語り，10月にも姪に宛てて，「今から，第1章（農業の章）を軌道にのせるまでに時間がある。その章は，私の想像力のなかではっきりと形をとり始めている。序章は明日出来上がるはずだ」[878] と，創作が順調に進んでいることを報告している。これらの記述から判断すると，彼の嘆きはそれ以前にもしばしば見られたような単なる心情の吐露であ

り，愛する者たちを失った苦悩が『ブヴァールとペキュシェ』中断の主要な原因と見なすことは難しい。

そこで，もうひとつの要素たる経済問題が浮上してくる。これについての具体的な検証に先立ち，執筆と金銭にかんするフローベールの考えに注目する必要があるだろう。なによりも実生活で長いあいだ，金銭は彼の頭を悩ます問題ではなかった。書簡でも「私は小説家でも劇作家でも，ジャーナリストでもありません。私は作家（écrivain）です。そして文体，自らの内にある文体はお金を生み出せません」[940] という考えを述べていた[6]。「作家」として経済問題に関わることは軽蔑の対象でしかなかったのである。

むろん同時代の他の作家たちとは異なり，執筆行為と金銭を切り離して考えることができたのは，フローベールが裕福な家庭に生まれた恩恵を享受し，資産だけでの生活が可能であったからだ。19 世紀の象徴ともいえるブルジョワとして育った彼は，作品のなかでは富の重要性を誰よりも強く意識していた。その証拠に彼が描く 19 世紀の物語は，『ボヴァリー夫人』にせよ『感情教育』にせよ金銭問題抜きには成立しえない。エンマは愛人との関係の破綻というよりも，借金がかさみ破産においこまれたために自殺する。フレデリックが最愛のアルヌー夫人と別れるのも，事業の失敗からアルヌーが破産したため，夫妻が田舎へと引っ越したことが原因であった。ブルデューが『芸術の規則』のなかで指摘しているように，フローベール作品では主人公の行為の選択の方向づけは金銭的な変動によって左右されているのである[7]。

では作家自身が経済的窮境に陥った唯一の時期，つまり最初の『ブヴァールとペキュシェ』執筆期，それは創作にどのように作用したのだろうか。彼が経済的に最悪の状態にあったのは，姪夫婦が破産の危機に瀕した 1875 年 4 月のことであり，この時から，以前にはほとんど語られることのなかった金銭の話題が突如フローベールの書簡の中核をなしていく。まず 75 年 5 月に姪夫婦を救うためパリの家を手放した時，カロリーヌに宛てて「ドーヴィルの地所から１万リーヴルの地代があり，『ブヴァールとペキュシェ』がうまくいけば私は人生を嘆かないことにしよう」[926] と書き送る。破産以前は作品＝芸術は至高のものであり，金銭は日常生活のための必要最低限な便宜手段にすぎなかった。だが今や，彼の「人生」を救うものとして土地収入の具体的金額と『ブヴァールとペキュシェ』がほぼ同列にまで置かれているのである。この危機に

おいてはじめてフローベールは，金銭を作品と並んで重要なものと意識するようになったのではあるまいか。

だが「地代」という言葉からもわかるように，彼が考えているのは実質的な労働なしに得られるものであり，いまだ真の危機的状況には至っておらず，なお創作は可能であったと見なせよう。じっさい，同日のジョルジュ・サンド宛書簡は，「これからずっと長い間，家から出ないつもりです。自分の仕事を進めたいのです。仕事は 50 万キログラムの鐘のように私の胸を押しつけています。姪が 6 月いっぱい私の家に来るはずです。その後で私はちょっとカルヴァドス地方に考古学と地質学の旅行をします」[925] と報告している。彼が生活上あくまでも「書くこと」を第一義に置いていたことは明らかである。また『ブヴァールとペキュシェ』の調査旅行を予定しているという決意からも小説に対する意欲が十分にあったことがうかがえる。

とはいえ，事態の悪化につれてフローベールの意識も否応なく変化していく。経済状態が逼迫し，クロワッセの自宅を抵当に入れ，住居さえも終身用益権が残るにすぎなくなると，書簡は悲劇的な様相を帯びてくる。フローベールは 1875 年 7 月 3 日，ツルゲーネフに宛てて次のように激白する――「私についていえば，駄目です！ すべてがうまくいきません！『ブヴァールとペキュシェ』はプランのままです。〔…〕そして，そこにとどまったままになるのではないかと恐れています。私は，からっぽになったように感じます。そして本当のことを言えば，現在（私の内部で）最も大きな苦悩はお金の心配なのです。私の哀れな頭は，まるで棒で殴られたかのように痛みます」[929]。あれほど精魂をこめていた執筆も経済問題が原因で停滞しているという告白にくわえ，窮乏は己を「棒で殴るかのように」痛めつけるという，きわめて現実的な脅威の認識である。

不幸なことに，危機的状況はなお好転せず，ドーヴィルの地所を売却し，資産の多くを手放すという恐れていた事態に至る。そのただなかに書かれたサンド宛書簡（8 月 18 日付）――

> 私の可哀想な姪は完全に破産してしまいました。私は 4 分の 3 の破産です。〔…〕私はできるだけはやく死んでしまいたいと願っています。なぜなら，私は終わってしまっていて，からっぽで，百歳よりも年を取ったように感じるからです。私を夢中にさせるには，小説のアイデアと主題が必要なのかもしれません。しかし小説への「信仰」

はもはやなくなってしまいました。すべての仕事は私には不可能です。このように私は今後の経済問題に不安を抱えているだけでなく，文学の未来も完全に破壊されてしまいました。[946-947]

文面からは，それまで良きにつけ悪しきにつけ常に言及してきた『ブヴァールとペキュシェ』の話題が消失している。文学への熱意，作品の構想さえ完全に打ち砕かれ，フローベールはまさに執筆不能な状態に陥っているのである。また「破産」という言葉が出現していることにも注意を払いたい。書簡はこの話題で始まるが，書き出しの唐突感は「破産」がいかにフローベールの思考に浸潤していたかの証である。彼が生涯を捧げてきた「書くこと」はこのとき初めて経済問題にとって代わられたのだ。そして「破産」は，創作への意欲を奪い去るばかりか，「百歳より年をとった」「できるだけはやく死んでしまいたい」という文言が示唆するように，死と直結する事象となるのである。

このような絶望感はエンマ・ボヴァリーの最後の思考と通底するものだと言えるだろう。じじつ「破産」に向き合った時のフローベールと小説の登場人物たちとの類似は精神面だけにとどまらない。エンマは借金を依頼するために複数の人物のもとを駆け回り，フレデリックもアルヌー夫妻を破産から救うため金策に走り回る。そして作家自身も，彼らと同様，借金調達に必死になるのだ。ただフローベールのばあい異なるのは，様々な友人たちに矢継ぎ早に書簡を送るというように，すべてを通信によって行ったという点である。この時期の書簡の数々は，簡潔な借金依頼の文章と具体的な数字の羅列に特徴がある。たとえば，1875 年 8 月 28 日にはラウル・デュバルに「フォーコン氏によると，誰かに 2 千 5 百フランの年金，そうでなければ， 2 万 5 千フランについての姪の保証人となってもらうことが必要だ。〔…〕フォーコン氏には 5 万フラン返済しなくてはいけない」[948] と報告しつつ，翌日の 29 日にはアジェノール・バルドゥに「図書館に住居つきで 3，4 千フランの仕事」[949] を見つけてくれないかと頼んでいる。また， 8 月 31 日には再びデュバルに，フォーコン氏に 5 万フラン返済しなくてはいけないことを繰り返し，友人のラポルトが総額の半分の 2 万 5 千フランの保証人になってくれたので，彼に残りの「 2 万 5 千フランのもうひとりの保証人」[950] になってもらえないかと尋ねている。さらに 9 月 3 日，ラポルトに「ドーヴィルの地所が 20 万フランで売却」[951] できたことを伝え， 9 月 6 日には，デュバルに「姪のために 2 万 5 千フランか 10 年間年金

2千5百フランの保証人になる」[953] というフォーコン氏宛の手紙を自分に送ってくれないかと依頼している。

その結果，資産をほとんど喪失しながらも，9月12日には，なんとか窮状を回避できたことをツルゲーネフやラポルト，サンド，ジュネット夫人に報告するのだ。金銭の数字やその変化する状況を刻々と同じ人々に書き送っているこの期間には，小説にかんする言葉はいっさい見られない。同時に精神，肉体とも虚脱状態が続き，ジュネット夫人にも，「肉体的に私は駄目になっています。絶えず今にも死んでしまいそうに思えるのです」[954] と訴えかけるのである。

以上のことから判断するに，『ブヴァールとペキュシェ』中断の2つの理由のうち，母親や友人たちの一連の死は無関係ではないまでも，大きな要因とは考えにくい。それよりも己にふりかかった経済問題が精神面に深い影響を及ぼし，創作への情熱までも奪って執筆不能へと陥らせたと言えまいか。すなわち金銭は，単に小説の主人公，商人や銀行家ら登場人物の背景的事象ではなく，作家としての根本的なあり方に密接に作用しているのである。また「破産」も，物語において機能的な役割を果たすのみならず，彼の「書くこと」という存在論的意義にも繋がる表象となっているのだ。

2．『三つの物語』と金銭

では，『ブヴァールとペキュシェ』中断後の『三つの物語』執筆は金銭問題となんらかの関係があったのだろうか。姪夫婦の破産をなんとか切り抜けた後，フローベールは1875年9月15日からコンカルノーに滞在するが，最初はマチルド皇女宛書簡に「私は何もしないでしょう。紙もペンも持っていきません」[952] とあるように，完全な休息を目的としていた。だが滞在先からの手紙を見ると，10日後にはカロリーヌへ「何か短いものを書き始めようと試みさえしている。なにしろ『聖ジュリアン伝』のプランの半ページ分を（たった3日間で）書いたのだからね」[961] と作品の構想を伝えている。また，姪の保証人になってくれたラポルトにももはや借金の話はほとんど持ち出さず，10月2日には仕事の計画を語り始める――「まだ文章が書けるかを見るために短いコントを書き始めたいと考えている。本当のことを言うと疑わしいのだが。君に聖ジュリアンについて話したことがあったと思う」[967]。新作の構想は，金銭

の話題と入れ替わるかのように出現してくると言ってよいほどだ。

じじつ上記のカロリーヌへの書簡を皮切りとして，彼は破産について相談をもちかけていた相手ほぼ全員に向けて，今度は新しいコントについて述べている。また，これらの書簡にはある共通点を見いだすことができる。フローベールは 10 月 3 日にジュネット夫人に，「私は『聖ジュリアン伝』を書き始めようとしています。ひたすら何ものかに没頭し，自分にまだ文章を書く力があるかどうかを見きわめようとするためですが，そんなことがまだ可能とはとても思えません。この作品はとても短いもので恐らく 30 枚程度のものになるでしょう」[970] と語り，同日サンドにも「私は聖ジュリアンの伝説を寝物語に書こうとしています。それは 30 ページほどのとても短いものとなるでしょう」[971]，またツルゲーネフに宛てても「それは大変短いもので，せいぜい 30 ページぐらいだろう」[972] と伝えている。ここで注目したいのは，彼がコントの内容よりも，ひたすらページ数を繰り返し伝えている点である。そしてこの数字と作品の組み合わせは，『聖ジュリアン伝』執筆中の他の多くの書簡にも認められるのだ。たとえば，執筆があまり進まないと嘆きながらも，10 月 7 日には姪へ「私は『聖ジュリアン』のほとんど 1 ページを書いた」[974]，11 日には同様に姪へ，「午後中仕事をしても， 6 行しか書けなかった」[979]，14 日には姪の夫へ「私は再び仕事を始めた。私のささやかな物語を 3 ページも書いた」[981]，19 日にはラポルトへ「『聖ジュリアン伝』のほとんど 10 ページが終わった」[984] と詳細に報告している。

では，このような数的表現は何を示しているのだろうか。ロラン・バルトは『零度のエクリチュール』のなかで，「エクリチュールの使用価値に労働価値をとってかわらせようとする」行為をブルジョワ的エクリチュールと呼び，フローベールを 19 世紀の「一種の職人組合を形成」する作家のひとりと位置づけている[8)]。じっさいフローベールは自身を「贅沢品をつくる労働者」[9)] と定義していた。また，サンド宛書簡でも「私の商品は今消費されるわけにはいかないのです。それは必ずしも同時代人のためにのみ創られていないからです。それゆえ私の労働の効用は不確定なものであり，従って支払いえないものです」[619] と，芸術の崇高性を主張していながら，作品にかんする単語をすべて経済用語で論じている[10)]。

これらを勘案すると，数字で提示される作品やその進み具合の記述から，無

意識的にであれ，彼が自分の作品を労働の対価として考えているのではないかという推測が成り立つ。つまりフローベールにとって進行状況を示すページ数は労働の成果を示すものであり，総ページ数は自分の商品の価値を示唆するものでもあると考えられるのである。とすると，作品にかんする数量的表現は，破産問題を抱えていた『三つの物語』執筆前の書簡における金銭的表記とどこか共通していると言えるだろう。

その後フローベールは翌年の 1876 年 2 月 18 日，予定どおり『聖ジュリアン伝』を終え，ただちに『純な心』のプランに取りかかる。だが回復に向かいつつあった彼に，同年 6 月またひとつの決定的な別れが訪れる。それは絶えず敬愛の情を抱き続けてきたジョルジュ・サンドの死であった。彼は彼女の葬式についてツルゲーネフに次のように書き送る――

> 気の毒なサンドおばさん（la pauvre mère Sand）の死に私は限りない苦痛を味わいました。葬式に行って，ひどく泣いてしまいました。しかも，二度まで。〔…〕 2 日後にクロワッセに帰りましたが，ここでは驚くほど快調です。すっかり気分も一新され，青葉や樹々の沈黙を楽しんでいます。私は冷水浴を始め（恐ろしい治療法です）気が狂ったように仕事をしています。『純な心』は，恐らく夏の終わり頃書き終わるでしょう。そのあとで，『ヘロディアス』に手をつけるつもりです。〔…〕甥の金銭事件は好ましい方向に進み始めたようです。未来にはごくわずかではありますが光明が見え始めています。［C，312］

フローベールにとってサンドが長きにわたり文学を語り合う，心を許した友人であったこと[11]，さらに亡くなった母と重なる存在ですらあったことは，この書簡で彼女が「気の毒なサンドおばさん」と哀惜の念をこめて呼ばれていることからも容易に推測できる[12]。じじつサンドはフローベールが金銭問題を抱えた時に，彼を救うためにクロワッセの自宅を彼女が買い取るという提案までしており，これに対しフローベールは深甚なる感謝の念を捧げている[13]。それゆえサンドの死に臨んで彼が味わった苦痛は疑いを容れない。にもかかわらず，同じ書簡の後半で，彼は驚くほど身体的・精神的に回復したと述べ，『純な心』の順調な進捗のみならず，次の『ヘロディアス』の構想まで練っている。もはやここには，絶望のあまり死にたいと願っていたかつてのフローベールの姿は全く見られない。その理由は何かと考えると，書簡の最後に記された金銭問題の解決が，未来の仕事や希望に大きく作用したからだという推測が成り立つだ

ろう。なによりもそれに続く「光明が見え始めています」という表現が，その後カロリーヌ宛の手紙の「太陽を受けて輝いている死海の水面が（まるでセーヌ川を見ているように）はっきりと目に見えている。ヘロデとその妻がバルコニーの上にいて，そこから神殿の金色に輝く屋根瓦が見てとれる」[C，341] という文章へと連鎖し，次いで『ヘロディアス』の冒頭の描写に投影されていると見るのは穿ちすぎであろうか[14)]。

ともかく，このツルゲーネフへの書簡を契機に光を見出したフローベールは精力的に仕事に没頭するようになる。そして『聖ジュリアン伝』開始前後に見られた会計士もどきの能力が，『純な心』制作の進捗につれ再び発現してくる。それは，作品を語る調子の変化，ページ数とはまた別の数的表現の頻出によって明らかなものとなる。たとえば 1876 年 7 月 23 日，ゾラに宛てて「2，3 週間過ぎた頃には『純な心』も終わっているだろう」[C，325-326] と，また 8 月 7 日には，カロリーヌに宛てて「フェリシテをすばらしい方法で終わらせなくてはいけない。14 日後には終わるだろう」[C，336] と書き送る。さらに 10 日にも「あと 4 ページほど残っている。今晩その準備をするつもりだ。20 日頃には書き終え，清書したいと思っている」[C，338] と，作品終了予定日をひとつの目標として設定するようになったのである。

では，なぜフローベールはこれほどまでに完成の日ばかりを記すようになったのか。その理由はツルゲーネフに矢継ぎ早に出した書簡によって明らかになる[15)]。彼は，まだ『ヘロディアス』がプランの段階にすぎないにもかかわらず，1876 年 10 月にツルゲーネフに次のように書いている――

> 仕事を手早く片付けるために，ずっと遅くまで，つまり元旦か，ことによると 1 月の終わりまでクロワッセに留まっているつもりです。そうすれば，おそらく 2 月の末には，書き上げてしまっているでしょう。5 月の初めに 1 冊にまとめて出版しようと思えば，まず『ヘロディアス』を急速に仕上げる必要があるし，そうしないと翻訳を 8 月に刊行できなくなるからです。『純な心』の翻訳はどうなっていますか？［C，357］

フローベールが作品の終了の日を執拗なほど気にかけていたのは，3 つの作品をまとめた書物を翌年の 5 月までに出版するという決意を持っていたからであった。それを実現するために，『ヘロディアス』を「手早く片付け」，「急速に仕上げ」なければいけないと時間の効率化さえ繰り返し述べている。あたか

も作品の完成自体が目的ではなく，期日に間に合うように完成させることが目的のような印象すら与える。じっさい，ツルゲーネフにもロシアで『三つの物語』の翻訳を8月に出版するようにと，やんわりとではあるが急かし，以後も『聖ジュリアン伝』のロシア語翻訳が遅れていると友人に催促の手紙を郵送し続けている。これは他作品の制作時には見られない態度であった。

1876年12月14日にはもっと露骨にツルゲーネフに要求する――「ご注意。さあ，今度ははっきり答えて下さいよ。例の『三つの物語』(ヘロディアス）は２月には書き上げているはずですが，来年４月にはロシア語で発表されていますか。その場合，５月の初めにまとめて出版することが可能なように思われます。今置かれている極度の貧困状態からして，そう強く望まざるをえないのです」[C，370]。この書簡からは，提示されてきた創作完了の期がいわば商品の納入の期日であったことが明瞭となる。

その証拠に，彼はツルゲーネフへ12月24日にミサへ行ったと伝えた後，「本状では（商売風に言うとですが）翻訳にかんし君にお礼を言うばかりです。本当を言うと新聞に連載した後，春に出版できたらいいのだが。つまり，まずロシアで，ついでパリの新聞で」[16] と書き送っている。「商売風に言うとですが」とわざわざことわりながら，「本状 la présente」という商業用語をあえてフローベールが使っていることは注目に値する。なぜなら，彼は『三つの物語』執筆以前は，作品を新聞で連載することを非難しており，しばしば次のような主張を行っていたからである――「新聞はつまるところ店のようなものです。店であるからには売れるものが多ければ多いほどよいというわけで，遅かれ早かれお客の都合が何にもまして大切ということになってしまうのです」[17]。これらの文章は，フローベールがいよいよ『三つの物語』という商品を店頭に並べて売買する準備を整えていたこと，またツルゲーネフの翻訳を意識的に商取引と考えていたことを暗示するものであろう。じじつカロリーヌには「この親愛なるモスクワ人の怠慢のおかげで『聖ジュリアン伝』は，12月になってからしかロシア語には翻訳されないだろう。1400フランを当てにしていたが，支払いは遅れてしまう」[C，340] と明確な売り上げの金額をあげて，ツルゲーネフの翻訳の遅滞を嘆いているのである。さらには，自作品を発表後，翻訳し二度出版するというフローベールの行為は，自分の利益を再投資し，よりいっそうの利潤を回収するという，高度なブルジョワ的経済行為であるとも見なせるだ

ろう。

以上のような経過をたどり，遂に『三つの物語』は彼の目論みどおり 1877 年 2 月 14 日に執筆完了し，その後「モニトゥール」紙が『純な心』を，「ビアン・ピュブリック」紙が『聖ジュリアン伝』をそれぞれ掲載，4 月 24 日にはシャルパンティエ書店から『三つの物語』がまとめて出版され好評を博した。最後に，フローベールが友人に出版経緯についてどのように述べたかを見てみよう。1877 年 3 月 3 日付ブレンヌ夫人宛書簡――「「シエクル」紙が，千フランという私の申し出の前に引きさがってしまいました。あなたのポリカルプはいささかお金を儲けようとしているのです（情けない話ですが，巨額なお金を必要としているのです）。ロシアの国は私の清書原稿一行についてほぼ 2 フラン支払ってくれますが，フランスだと 20 スーよりちょっとましというところ。これは話にならない値段です。私には金銭上の問題は何もわからないと言わせておきましょう」[18]。この書簡の直後，フローベールの催促も実り，ツルゲーネフの翻訳になる『聖ジュリアン伝』は同年「メッセンジャー・ド・ヨーロッパ」紙 4 月号，『ヘロディアス』は同紙 5 月号にロシアで出版され，期待どおりフローベールにある程度の収益をもたらしたのである。

結　　語

破産問題がなければ，『ブヴァールとペキュシェ』は中断されなかったであろう。また『三つの物語』は絶えず金銭と関連させて考えられたからこそ完成したことも否定できまい。換言すれば，『三つの物語』は経済的危機から生み出され，逆説的ながら，その危機から作者を救うという役割を担っていたのである。そして，フローベールが『三つの物語』以前の小説のなかで，共感と嫌悪という矛盾した感情に揺れ動きながら描き続けたブルジョワ的商才を作者自身が持っていたことも作品完成に大きく寄与していたと言えるだろう。もちろん『三つの物語』が果たした役割はそこにとどまらない。同作完成後フローベールは，「しばらく休んでから，この冬，あれこれと想いをめぐらしたふたりの好人物に再びとりかかるつもりです。今では彼らをもっと生き生きとした，しかも作りものではないかたちで，思い浮かべているのです」[19] と，構想も新たに再度『ブヴァールとペキュシェ』に挑戦する。そのことからも『三つの物語』が

もたらした金銭的・社会的な成功は，フローベールに作家としての自信と意欲を取り戻させる原動力のひとつとなったと結論づけて差し支えあるまい。

註

1）*L'Œuvre de l'œuvre. Études sur la correspondance de Flaubert*. Textes réunis et présentés par Raymonde DEBRAY GENETTE et Jacques NEEFS, Saint–Denis : Presses Universitaires de Vincennes, coll. «Essais et Savoirs», 1993. これ以前には，1968 年にカルリュが文体，演劇，政治などフローベールの思想全般を書簡によって分析した書物を出版した（voir Charles CARLUT, *La correspondance de Flaubert. Étude et répertoire critique*, Paris : Nizet, 1968）。また，デュカンやサンド，モーパッサンに宛てた書簡を研究したレドの著作や，ポワイエが書簡を使いフローベールの美学を分析した著書もあるが（voir Martine REID, *Flaubert correspondant*, Paris : C.D.U. et SEDES, 1995 ; Thierry POYET, *Pour une esthétique de Flaubert. D'après sa correspondance*, Saint–Pierre–du–Mont : Eurédit, 2000），体系的な書簡批評は他に見あたらない。

2）フローベールは『聖ジュリアン伝』執筆の理由として，1875 年 10 月 3 日に「自分にまだ文章を書く力があるか知るためだけ」に始めたとジュネット夫人へ語っている。また次の『純な心』のプランについて述べたのは，同年 12 月 16 日のサンド宛の手紙が最初であると思われる――「それ〔『聖ジュリアン伝』〕は，今の世界よりも私の居場所をはっきりと示してくれて，気分をよくしてくれます。そして次は現代の小説を書きたいと思っています」（Gustave FLAUBERT, *Correspondance IV (janvier 1869 – décembre 1875)*. Édition établie, présentée et annotée par Jean BRUNEAU, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1998, pp. 970 et 997. 以下，プレイアッド版『フローベール書簡集Ⅳ』からの引用は拙訳で，原書頁数を［ ］内に示す（訳出にあたっては，中村光夫他訳『フローベール全集 10，書簡Ⅲ』，筑摩書房，1970 年を参照した）。またコナール版『フローベール書簡集Ⅶ』（Gustave FLAUBERT, *Correspondance, septième série (1873 – 1876)*. Nouvelle édition augmentée, Paris : Louis Conard, 1930）からの引用も拙訳であるが，出典表記はプレイアッド版と区別するため，原書頁数にＣを付す。

3）Voir Maurice NADEAU, *Gustave Flaubert, écrivain*. Nouvelle édition, Paris : Les Lettres Nouvelles, 1980, p. 231. Voir aussi Herbert LOTTMAN, *Gustave Flaubert* (Traduit de l'anglais par Marianne VÉRON. Préface de Jean BRUNEAU), Paris : Fayard, 1989, pp. 406–415.

4）フローベールは同様の文章を，10 月 25 日にはカロリーヌへ，10 月 28 日にはフェドーとサンドへ，10 月 30 日にはツルゲーネフへ送っている（出所頁は順に

593, 596, 598, 600)。

5）フローベールは『三つの物語』を執筆中の 1876 年 8 月 10 日，姪宛の書簡で次のように過去を分析している――「私の考えていることをお前に言うべきだろうか。可哀想なお婆さんが亡くなって以来，それと知らずに自覚症状のない重い病気にかかっていたように思うのだ」[C, 338]。

6）フローベールは本を出版して金銭を得ることを嫌がり，次のようにレニエ夫人に書き送っている――「金銭はそれがどんなものであれ，私には苦々しい皮肉と思われるのです。そして栄光というものは，もう私の年齢になっては信じられないものに属します。けれども私は文章を作り続けます」[631]。

7）Voir Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Paris : Éd. du Seuil, 1992, p. 20.

8）Roland Barthes, *Le Degré zéro de l'écriture, suivi de Nouveaux essais critiques*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Points», 1972, p. 45.

9）Gustave Flaubert, *Correspondance III (janvier 1859 – décembre 1868)*. Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1991, p. 585.

10）吉沢英成『貨幣と象徴』，ちくま学芸文庫，1994 年，133–157 頁参照。貨幣と言語の類似については，マルクスが注目して以来さまざまに論議が重ねられているが，その類似は象徴体系という観点から説明できると筆者は結論づけている。

11）トリコテルは彼らの友情の軌跡を詳しく綴っている（voir Claude Tricotel, *Comme deux troubadours. Histoire de l'amitié, Flaubert – Sand*, Paris : C.D.U. et SEDES, 1978)。また 1877 年 8 月 29 日にフローベールは，サンドの息子のモーリスに『三つの物語』のなかの『純な心』はサンドの気に入るように書いたものだと告げている（voir Gustave Flaubert, *Correspondance, huitième série (1877 – 1880)*. Nouvelle édition augmentée, Paris : Louis Conard, 1930, p. 65)。

12）フローベールはモーリスに「母親を二度埋葬したようでした」[C, 309] と告げ，悲しみを分かち合っている。

13）サンドは 1875 年 10 月 8 日，フローベールの気持ちに大いに配慮しながら，「私がそこ〔クロワッセの家〕を買って，あなたが生きている限りそこに住むのはどうでしょう。私はお金はありませんが，少し持っている資産を動かしてみましょう」[977] と提案している。結局は実現しなかったが，フローベールは「あなたの手紙を読んで泣いてしまいました。〔…〕どんな感謝の念を捧げればいいのでしょう」[977] という返事を出している。また，サンドはそれ以前の 8 月 20 日にも，バルドゥにフローベールのためによい仕事を見つけてくれないかと頼む手紙を送っている [947–945]。

14）セーヌ川を見ているように輝いている死海が見えるという書簡の表現と『ヘロディアス』の冒頭描写の類似をとらえて，ゴト＝メルシュはフローベールの創作における書簡の重要性について指摘している（voir Claudine Gothot-Mersch, «La

Correspondance de Flaubert : une méthode au fil du temps», in *L'Œuvre de l'œuvre*, op. cit., p. 57)。なお『ヘロディアス』の冒頭は，ヘロデが未明に城のバルコニーから眼下を眺める場面で始まる――「漂っていた朝靄が破れて，死海の輪郭が現れた。マケルースのうしろに昇る曙が赤く輝きながら広がった」(Gustave Flaubert, *Trois Contes*. Introduction et notes par Pierre–Marc De Biasi, Paris : Le Livre de Poche, coll. «Classique», 1999, p. 108)。

15) フローベールはツルゲーネフへ 1879 年 6 月 25 日に手紙を送っている――「『純な心』はおそらく夏の終わり頃書き終わるでしょう。その後で『ヘロディアス』に手をつけるつもりです。〔…〕ところであなたの方はいかがですか。仕事をしておられますか。『聖ジュリアン伝』の翻訳ははかどっていますか。いつもどおり馬鹿なことを申しては何ですが，この作品がロシア語で印刷されたところを見たくてたまらないのです」[C, 312]。

16) Gustave Flaubert, *Correspondance, supplément (1872 – juin 1877)*. Recueillie, classée et annotée par René Dumesnil, Jean Pommier et Claude Digeon, Paris : Louis Conard, 1954, p. 297.

17) Gustave Flaubert, *Correspondance II (juillet 1851 – décembre 1858)*. Édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1980, p. 291.

18) *Correspondance, supplément (1872 – juin 1877)*, op. cit., p. 323.

19) *Correspondance, huitième série (1877 – 1880)*, op. cit., p. 16.